

## インタビュー

まちづくりに最も必要なのは  
イマジネーションのある人材を育てることIt is most important for "Machizukuri" to develop human resources  
with fertile imagination

「語り手」森栗茂一氏 正会員 大阪大学コミュニケーションデザイン・センターコミュニケーション部門教授

「聞き手」松島格也氏 編集幹事長

2014年12月6日(土) 大阪大学にて

文学博士でありながら、交通計画や地域コミュニティの形成支援など、全国各地のまちづくりに精力的に携わっている大阪大学コミュニケーションデザイン・センターの森栗茂一教授。まちづくりに目を向けるようになった背景やこれまでの取り組み、さらには今後のまちづくりにおける課題などについて伺いました。

### 阪神・淡路大震災を機に まちづくりの道へ

—現在はまちづくりに関わっておられる森栗教授ですが、そもそも民俗学がご専門です。

森栗 — 学生のときに柳田國男の民俗学にふれ、その後、宮本常一の著書

「民俗学への道」に感動して傾倒しました。宮本は農業文化だけでなく、流通や旅、道にとっても関心が深かったのです。私はもともと地理学科でしたので、宮本の考えに共感する部分

が多く、博士論文は民俗学でも農業文化でもなく都市民俗学でした。

—そんな森栗先生が、まちづくり

に関わるようになったきっかけを教えてください。

森栗 — 都市研究を始めたところ、1995年に阪神・淡路大震災が発生、実際に都市がつぶれるのを目の当たりにしました。こんなときに都市民俗学の研究なんかしている場合じゃないと思い、ふるさとである神

戸市長田区のがれき撤去に携わったのです。

そこで初めて知ったのは、土地・建物・住人それぞれに権利があって、勝手にがれきを動かせないということでした。とはいえ、復興のためにはがれきの撤去が必要で、先頭に立つて地域の人と一緒に、所有者の署名



## 森栗 茂一

MORIKURI Shigekazu

1954年神戸市生まれ。大阪教育大学卒業後、高校教諭を経て1990年日本文化学専攻として大阪外国語大学助教授に就任。1992年から国立歴史民俗博物館民俗研究部客員助教授。阪神・淡路大震災後、復興まちづくりに関わる。2002年神戸まちづくり研究所副理事長をはじめ全国のまちづくりに携わり、2007年現職の大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授に就任。文学博士。

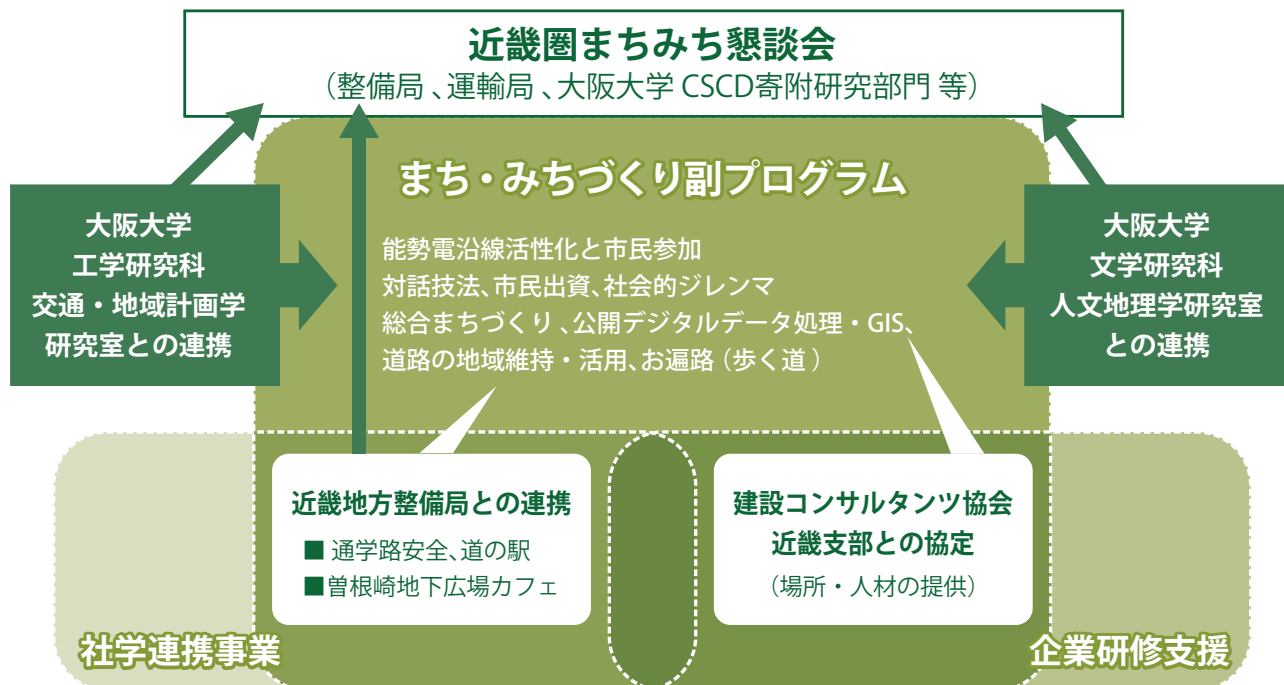


図1 まち・みちコミュニケーション研究室の使命

を集めて回ったのです。そうして被災地で活動する中、仮設住宅では孤立死される方が増えていました。ここには、お互いが出会えるようなコミュニティスペースが必要だと思い、当時の兵庫県知事だった貝原さんに「ふれあいセンター」の設置を持ちかけました。そこで地蔵盆を聞くよう働きかけたのも私です。このように素人ながらも、震災でのがれき撤去と仮設住宅でのコミュニティづくりに関わったことが大きなきっかけです。

**「聞く」「まとめる」技法が大切**

——森栗先生は大阪大学コミュニケーションデザイン・センター<sup>(注1)</sup>で、まちみちコミュニケーション研究室に所属されています。道路をキーワードに「つながり」を研究されているのでしょうか。

**森栗**——車のための道路だけでなく、歩くみちや自転車のみち、子どもたちが遊ぶみち、人が出会うみち、そういった、いろんな「みち」について、もっと考える必要があるという思いが出发点です。まちとみちのコミュニ

ニケーションは大切ですが、とても難しい課題を抱えています。

その関係を人に例えるならば、まちにとって、みちは大切な血管であり命綱。もっと意見を尊重して語り合える場が必要で、多様な思いを全身にいきわたらせる「マツサージのような市民活動」が重要なのです。役所任せの無責任にならずに、もっと高齢者や女性の潜在能力も生かして、「健康なまち」をつくるためです。そこに住む人が、自立的に地域をマネジメントできるように……。そこで、土木技術者にお願したいのは、「議論しても意味がない」「話し合いなどしたら大変なことになる」と考えないで、現地へ足を運んでほしいということ。社会基盤の整備とは、実施してみなければわからないことが多いのだから、地域の人と話し合う場を増やしてほしいのです。

——「自立的」は重要なキーワードですが、そういう取組みをサポートする人材をどのようにして育てればよいのでしょうか。

**森栗**——それについては最近、技法があると思いはじめました。メディアエーション技法といって、専門家と非専



写真1 「お遍路カフェ」の講義風景

門家をつないで地域をつくり込んでいく方法です。一つは、人が話したい雰囲気をつくって、話してもらおうということ。

もう一つは意見を出してまとめる作業。これは意外と実践されています。私は授業や講演の際、話題提供は半分にして残り半分はまとめる時間に費やします。100人いてもまとめられますよ。なぜかというところ、たくさんの考えや思いがあっても20字の言葉で切り取ってもらうからです。少し乱暴な作業ですが、こういうまとめ方もあるんです。紙などにまとめて、皆で方向性を共有することは重要です。

——「見える化」ということですね。

**森栗**——そうです。意見を「聞く技法」と「まとめる技法」、これがファシリテーショングラフィックスなど、さまざまな技術とくっついています。この二つの技法があつて、それを展開するための技術があります。それらすべてを、一つの技術に落とし込んだのがワークショップ。現在の定型化された、まちづくりワークショップにはすべてが含まれています。人

びとの発案を促進し、まとめることができ、発表会があり……。実際に震災以降、数々のワークショップに立ち会った経験から言えば、「完璧」すぎるがゆえに何の役にも立ちません。たとえば、班とにかくよくしゃべる人がいて「衆議」になっていない、しゃべりたい人が発言できていない。これでは、本当に意見をまとめられているのか疑問です。私が宮本常一に学んだことの一つは、まず、相手にいかに語らせるか、言わせるかです。

だからこそ、本当にまちづくりに役立てるためには「聞く技法」と「まとめる技法」に分けて行う必要があります。こういったメディアエーション技法を、技術者や行政の人、コンサル、工学を学んでいる人たちに教えるために、来年、大学院の共通科目として設定します。

——現在、開講されているものとは別に設定されるのですか。

**森栗**——すべて改組して新たな科目に設定し直します。社会人公開の大学院共通科目ですから誰でも受けられますよ。

しかもメディアエーション技法に加えて、コミュニケーションに必要な

デジタルデータの処理なども学べるようにします。さらに土木に関連する鉄道と道路のまちづくり、道路の再構築も含めた道路課題、総合まちづくりに関する問題といった科目群を設定し、これらをトータルに学べる授業にします。

### 想像力の欠如が最大の課題

——まちづくりにおいて、行政や企業などの連携がうまくいかない例が多々ありますが、その原因はなんでしょう。

**森栗**——原因は大きく三つあると思います。一つは「お金がない」。これは技術者の努力でどうすることもできません。

二つ目は「たて割り」。コミュニケーションがないことです。上司に相談しないために、3カ月ぐらい止まっていたプロジェクトなど、数え上げればきりがありません。

三つ目は「イメージネーションの欠如」。土木技術者と話をすると、思いもよらなかった、考えたこともない、ということが多々あります。なぜかというと、現場に行かないからです。

図面を見て計算をして、発注するだけからです。

大学ではそんな想像力のない人が工学教育をしているようでは、学生たちは持っていたイメージネーションをどんどん失っていくんです。その課題を解決するために、道路のこともまちのことも考えられる授業をつくる、それが私の仕事です。

——メデイエーション技法というかたちで体系化することが大切だということですね。

**森栗**——はい、個人の特性に頼ってはいけません。政策、科学、教育にしていくためには、技法を確定させ、大学で実装しないとけません。社会基盤に関する課題は、技術者だけで決める話ではないのです。

### 枠を越えた人を認めるそれが関西の良さ

——先生のフィールドでもある関西でも、さまざまなまちづくりが行われていますが、その特徴や強みはどういったところにあるとお考えでしょうか？

**森栗**——最近驚いたのは京都市の「歩くまち・京都」。嵐山への車の流



写真2  
メデイエーション講義に  
取り組む学生



整備後のイメージ



現況

写真3 京都市・四条通の歩道拡幅プロジェクト (提供:京都市)

入を抑制させて渡月橋を一方通行にする試みが行われ、四条通の歩道拡幅と公共交通を優先化させるプロジェクトが進められています。いろいろな意見はありますが、ビジョンが確立されていて、その方向にきちんと組織が動いています。かなりむちゃなことをやっているようにも思えますが、よって、たかっつぶしたりしない。水都大阪の取組みもわかり。私の授業で連携している能勢電鉄にお

いても、学生の意見を取り入れて、お金がなくてもできることをやろうとチャレンジしています。そういう意味で、関西の強みといえば、枠を越えたとつぴな人間をつぶさないことだと思います。

——「やってみなはれ」的な感じでしょうか。

森栗——そうそう、関西の強みは、やってみたらいいし、やったことを認める懐の深さでしょうね。

しかし先ほど言ったように「お金がない」、「たて割り」に文句を言う暇があったら、イマジネーション力を高めて、自分にできることを見つけて一生懸命に努力しなければならぬ。そしてそれを仲間を広げていかなければならない。そういう気概が薄れているのが問題です。大学生も同じ。先生がどんな指導をしようが「俺はこれでいく」という気概を持って勉強してほしい。そんな学生を育てる

科目をつくらうとしているんです。

——最後に、森栗先生が考える、まちづくりにとって最も必要なものはなんでしょう。

森栗——コミュニケーション能力はもちろん必要ですが、イマジネーションを持った人材と、それを認める会社だと考えています。イマジネーションのある人たちがネットワークをつくり、一緒にいろんな試みをしながら進めていくことが大切。人材育成が大学の重要なミッションですから、そのために私は一生懸命に取り組ま

す。

——豊かな創造力を持つ人材を育成し、チャレンジし続けることが大切だということですね。本日はどうもありがとうございました。

(注1) 大阪大学コミュニケーションデザイン・センターは、「デザイン力」柔軟な想像力」の育成を目的に2005年に設置された。大学院生を対象とした全学共通教育を行うことと、社会学連携・市民サポートを先頭に立って実践することが二大ミッションとのこと。学外スペース「アートエリアB1」における社会学・地域連携文化活動が、2009年メセナアワード「文化庁長官賞」を受賞するなど、その活動は高い評価を受けている。

「執筆」近藤友博